防災サロン打ち合わせ履歴

日時（定例会後）	A（自助力向上）サロン	B（共助力向上）サロン	C（公助連携力向上）サロン	D（時事防災）サロン	塾長コメント（鷲山）
4月16日	田中栄治（リーダー）、長嶋（副リーダー）、田中晃（記録）、相原、荏本、釜石	山田（リーダー）、増田（副リーダー、記録）、磯野、稲垣、早川	鷲山（リーダー）、杉本、高松、田中喜世美、山口	樋口（リーダー）、池田、小林、佐々木、中島、吉開	「防災塾・だるま」において、自助・共助・公助連携、時事防災課題の４サロンでのキックオフの回となりました。私の期待通り、その４テーマで、「自分はこのサロンでやりたい。」と決められた方が多かったように思います。それぞれの取組経験、課題意識をしっかりお持ちの会員の皆様ですから。 定例会で、「なぜ、分けるのか？」との率直なご質問がありました。分けて別方向に進むのではなく、これらの課題の「統合」を目指すものです。過去の災害は、「自助・共助・公助」と「新局面への対応」が乖離した状態が被害を拡大してきたと私は考えるからです。
	＊無事に生き残ることを主眼、最初のテーマは「首都直下地震（震度）に備える」 ＊その後、風水害（洪水・土砂災害）、津波・地震火災・在宅避難の奨め、家庭内の安全空間の確保のDIGなどを検討 ＊打ち合わせはZoom主体で	＊災害時人的被害ゼロを目指して「共助で何が出来るか」を災害タイプ別に考え、提言する（地震：稲垣、津波：山田、洪水：早川、土砂災害：増田、避難所：磯野）。まずは、担当者の居住地域の課題をテーマに沿って提出。 ＊フェーズ毎に、取組みプロセスを明確に【事前対策（平常時の備えと活動）】【発災・被災直後】【事後対応】 ＊誰でも使えるマニュアルを作成し、モデル地区で訓練を行いたい。	＊行政と住民が話し合って連携を模索 ＊学区の連携づくりで、自助・共助・公助連携の実現（太尾小学校） 　→これを一般化するためのガイドラインが必要	＊SDGsメモ（防災に関連すると思われる項目を表示）を配布。関心のある項目を示してもらいたい（樋口） ＊SDGsに取り組んでいる専門家や、行政職員の話を聞いて、アドバイスを受けたら ＊まち歩きや見学会も考える	
5月28日	長嶋（副リーダー）、田中晃（記録）、植山、荏本、釜石、松島	山田（リーダー）、増田（副リーダー、記録）、磯野、稲垣、早川、松原	鷲山（リーダー）、江上健、江上富美子、杉本、高松、田中喜世美、山口	樋口（リーダー）、池田、佐々木、中島、吉開	この回は、２０２１年度通常総会で、新体制が確立。サロンも正式スタートした回です。 Ａサロンは、「耐震化」に、Bサロンは「地域の災害課題に対応した共助の取組」、Ｃサロンは「地域全体の福祉、教育、行政との連携」を、Dサロンは「ＳＤＧｓ・気候変動」という課題に研究の焦点を絞っての議論がされています。 Ａ「耐震化推進」は地震に対する減災対策の最重要課題であり、かなり進んだ部分と、進んでいない部分の課題分析を公助、共助組織の取組状況から分析。 Ｂサロンの皆様は、それぞれの地域で実践を積み重ねてきた熱い思いに溢れています」。 Ｃサロンは、７月に大川小学校元保護者、佐藤敏郎氏をリモートで招いての講演会を具体化しました。 Dサロンは、「SDGsで一番達成率が低いのは、温暖化による環境の激変とそれがもたらす自然災害」との視点から、方向性を模索されています。この後、６月にされた「緑区白山２０１４年土砂災害」の見学は、鶴見川流域の丘陵上で発生した災害で、自助、共助、公助そして気候変動がからんだ問題でした。Dサロンとして「足元の気候変動」として焦点化できることを私としても期待したいところです。
	談義の会の流れを確認 ＊地震の際には、在宅避難が基本 ＊そのためには家の耐震化が必要 ＊共助で耐震化を推進、具体的な取り組み例（4例） ＊在宅避難に必要な準備 →今後、耐震化促進の具体案をまとめる。	＊山田（津波）：平塚市の現状を説明 ・相模湾に面した砂丘地域が多く、津波リスクがある。 ・相模川と金目川に挟まれ、津波遡上や洪水のリスクも大きい ・逃げ地図を活用して避難訓練。マイタイムラインの作成を促している ＊稲垣（地震）：旭区の高台のリスクは地震と火災のみ。自治会で防災訓練をしっかりやっている。 ＊早川（水害）：一人で逃げる事が難しい要援護者への対応が問題。 ＊増田（土砂災害）：急傾斜やレッドゾーンがある。はやま防災ネットワークニュースを出して啓蒙している。共助にどう結び付けられるか。 ＊磯野（避難所）：避難所が整っていないと関連死が起こる。皆で思いやり共助を。 ＊松原（水害）：防災ボランティアネットワークで活動中、共助を推進するための連携を模索している。	＊自治会から地域全体の福祉、教育、行政との連携をしながら鎌倉のまちづくりをしたい（江上） ＊女性の立場で出来る事を考えている。保護者、小中学校、福祉を主に地域との防災、子供たちに考える防災を教えたい。 ＊みんなのためのまちづくり、コミュニティづくりを ＊中高生との交流。神奈川一被災地とのコミュニケーションを図る ＊みんなが分かる理念づくりを。 ＊自助・共助・公助の統合を目指したい。太尾小学校モデル（ふるさと太尾構想）のもとに、学区の全ての共助組織が連携していて、それに児童と保護者、住民に実地も含めた防災訓練を行っている。	＊議論の活性化を期待して「感染症とは？」を作成しHPに載せた。 →感染症は未だ収束の目途が立たない。今後の情勢の変化をにらみながら深堀りが必要。 ＊SDGsで一番達成率が低いのは、温暖化による環境の激変とそれがもたらす自然災害。その克服のヒントになりそうなのがグリーンインフラで調べ始めた（→6月に行ったみどり一むでの、打ち合わせで発表した） ＊Ｄサロンは取り扱う範囲が広く、現段階でテーマを絞り込んで成果物を出すのは難しい。現段階では各自がアンテナを張り、面白そうな（必要と思われる）テーマを探してきて、意見交換をするのが良いだろう。 →いくつかテーマがでてきたら、その中から2月に何を発表するかを決めよう（来年度につなげられるテーマとしたい） ＊6月5日に「緑区白山見学会」を行い、午後から「みどりーむ」で「崖崩れや災害リスク」に関する意見交換会を行う。 →このイベントを通して、取り組むべきテーマが見つかるかもしれない。	
7月28日	談義の会に対する意見交換が活発に行われた結果、今後の取組みを話し合う時間が取れなかった。その分を日常的なZoomによる情報交換で カバーしていく。	山田（リーダー）、増田（副リーダー、記録）、磯野、稲垣、早川	鷲山(リーダー)田中喜世美(副リーダー) 江上　大西　　山口	樋口（リーダー）、吉開（副リーダー）、池田、佐々木	新体制での本格的な定例会・談義の会・サロン活動のスターとの会です。 Ａサロンは、談義の会の感想と意見交換で盛り上がり、時間切れとなったのとの子ですが、９月に主催するの談義の会の方向性、その後の資料でかなり具体化が進んでおり、素晴らしいです。 Bサロンは、「マイタイムライン」の実践具体化について開発の方向が進んでいるとのこと。１１月談義の会の講師と内容を具体化するとともに、鷲山が開発中の「風水害コミュニティ・タイムライン」を提示しますので、ぜひご検討をお願いします。北綱島小学区の「災害種別避難所一覧」地域・学校連携の防災教育を参考に新しい共助体制のoutputを目指せると良いですね。 Ｃサロン主催の講演は佐藤氏の被災体験に学ぶところが大きかったところです。「レアな大災害に対する、事前からの連携」という課題が浮き彫りになっています。これに対して、私は「地区防災計画推進」をだるまの方針に加えるよう皆さんに提案したいところです。 Dサロンは、「気候変動災害」という巨大な課題への取組を模索されていることに敬意を感じます。私としても、かつて校長を務めた太尾小、北綱島小学区が「気候変動による鶴見川洪水クライシス」に直面し、その「大倉山地区防災計画風水害編」原案を策定しています。 気候変動による未曾有の災害は、身近に現実化している災害リスクとして、各サロン連携して取組が進められることを期待します。
		＊自分の地域の災害リスクを踏まえた「地震・津波・土砂災害」のマイタイムラインを自由に作成して持ち寄り検討しよう。 ＊「マイタイムライン」は、Bサロンとして書き込みのできる書式（ブランクフォーム）を開発し、地域の住民や自治会に提案して提出。 →書いてもらったマイタイムラインについて分析・改良して地域で実際に役立つものにする。 ＊11月26日の談義の会は、「被災者0を目指す、自助・共助・公助との連携」をテーマに、北綱島小学校防災拠点運営委員会垣中副会長を講師に企画しているが、共助のあり方にポイントを置き、Bサロンとしての研究結果も発表できるようにしたい。	「災害を克服できる防災まちづくり・防災教育」の未来像を考える ＊浸水区域を確実にハザードマップに入れる必要がある（太尾小学校、上大岡） ＊横浜の避難所は地震対応、拠点が遠いので自治会館にしてもらいたい。 ＊避難所の対応が風雨・地震で違う。地域で手上げ方式で用意する必要がある。 ＊避難所の運営・開錠・子供の引き取り方法・地域との連携等、検討すべき事がたくさんある。 ＊全体のコミュニティが必要 ＊地区防災計画をツールとした、具体的な「防災まぢつくり」が必要。	＊6月に行った打ち合わせで、鶴見川流域の話で盛り上がった。水マスタープランは、現在進行中。 ＊テーマはSDGｓに立ち返って選ぶべき。 ＊現在起きている気象現象がいかに異常かを再認識し、「気象情報の見方・活かし方」を知ることが必要ではないか？ →気象台に行って、情報収集。または、気象台の人に来て話してもらったらどうか。 ＊異常気象と鶴見川流域で起こりそうな災害の関連については、引き続き調べてみる（樋口） →その上で、話をしてもらえる方（専門家）を探してみたい。	
9月17日	田中栄治（リーダー）、荏本、釜石、高松、田中晃	山田(リーダー)、増田（副リーダー）、早川、稲垣、松原、磯野、河原(新)	鷲山(リーダー)、江上健、江上富美子、杉本、高松、田中喜世美、山口	樋口（リーダー）、吉開（副リーダー）、池田、佐々木	Ａサロン主催の談義の会「震度６強の首都直下型地震に備えるための耐震化推進」ありがとうございました。行政の制度から実態と課題の分析まで知の共有ができと思います。また、「救出計画」（耐震性の低い家屋をマークして救出作戦を見える化するとともに、耐震化を後押しする）は注目すべき提案です。 Ｂサロンに一度参加させていただきましたが、「マイタイムライン」について案を持ち寄り、熱心に研究協議されていて、「これぞ防災サロン」と思いました。「人とのつながりを大切に」という意見は、Ｃサロンでも熱く語れれています。人とのつながりを災害の時系列で「見える化」していく取組が「コミュニティ・タイムライン」ではないかと思います。１１月の談義の会では実践例をもとにその点に迫れるとよいかと思います。 Ｃサロンでは、耐震化推進をそれぞれの地域で推進していく困難さがメンバーから語られました。自治会、マンション等、学校等事業所が災害の時間軸でやるべきことを共通理解化する「コミュニテイ・タイムライン」必要性では一致したので、メンバーの地域に対応した立案を進めたいところです。 Dサロンは地球規模の気候変動がメンバーの多くが住む鶴見川流域の災害リスクに現実化する可能性とについて知の共有を進めています。地元で環境保全活動に取り組んでいるメンバーの実践と防災がつながってきたところがワクワクします。Dサロンからの発信できるものが創出できそうです。 Ａサロンから指摘があったように、講師を招いて学びたいことと、サロンとして発信したいことの両立は課題だと思います。
	◎耐震化の提案についての整理が必要 　耐震化の推進方法は提案①または提案②の2通りがある 提案①　耐震化のコーディネータになる 　やる事　旧耐震の所有者に検討の土俵に乗せる 　役割　　耐震化に関する知識を取得し、所有者に寄り添ってサポートする 　　＊知識は広く浅くで、専門家である必要はない 提案②　倒壊家屋からの救出計画を推進する 　やる事　旧耐震家屋の調査、マップ化をする。 　役割　救出計画を作成し、自治会館に掲載。 　＊全員の救出困難を認識してもらう 　ぜひ、どちらかの提案で活動して頂きたい ◎耐震化の勉強会について ・実際にまち歩きをして、老朽家屋を調査してみる(計画書を作成して参加者を募集) ・耐震診断について ◎今後の計画 ・耐震化の勉強会(具体的な内容は別途打ち合わせる) ・耐震化コーディネーター養成講座の実施(今後、具体化の検討) ・次のテーマとして、家具の固定化の意見がでたが具体的な内容の提案をしてもらう	「Bサロンの今後の進め方」川崎市在住の河原さんを新メンバーに迎えた。11月26日の談義の会に向けて準備を進める。第1段階として自分の地域の災害リスクから「気象災害」「津波」「地震」「内水氾濫」マイタイムラインをもっと研究して作成。それを持ち寄り市民に書き入れてもらえる「モデルマイタイムライン資料」を作成。地震や津波土砂災害は急に発生する災害で難しいが挑戦していく。その後段階を踏んで「ourタイムライン」「コミュニティタイムライン」に挑戦していく。11月26日談義の会に発表する内容の充実の為にBサロンの打ち合わせを実施する。(200m会議) 磯野さんが共助の重要性について「自分の中の共助の自覚、家族、友人、隣近所との共助、人体が共助で営まれている」とのコメントを！人とのつながりを大切にを基本として取り組んいく。	・リーダーからの提案 「水害・地震コミュニティ・タイム・ライン」 ・　地域防災拠点のタイムラインを作成して、職員・拠点の訓練にはたいへん有効だった。 (コミュニティ・タイムラインは「地区防災計画」の早見表のようなもので別のものではない。) ・マンションでも地震減災タイムラインを実践し組織的な活動ができている。水害タイムラインも検討中である。(原案提示) ・地域によっては新築ラッシュ、建替え、高齢者の住替えが進むが、コミュニティは希薄になっている。 ・コミュニティ・タイムラインの共有はぜひ必要であると思う。(見解は一致) ・タイムライン以前に、「安全な在宅避難」を目指すべきことを啓発している段階である。 ・幼稚園児の避難場所として地域の事業所がビルへの避難を申し出てくれた例もある。地域でそうした話し合いや計画ができていくことが望ましい。 (今後の方向性)Cサロンとしては、学校、自治会等、事業所が共通理解をもって行動できるように「コミュニティ・タイムライン」の検討を進めていきたい。	当面のテーマ（方向性）：温暖化により激甚化した気象現象を読み解き、防災行動に活かす ＊談義の会の進め方： 　専門家（気象台？）による気象現象の解説＆鶴見川で予想される災害例と対策の実例（行政・河川事務所）＋α（地元で鶴見川流域の保全に携わっているメンバー：里山の整備や梅田川の清掃・ホタルの繁殖のための環境づくりetc に活動紹介をしてもらう） →重層的な内容に挑戦する。地元の活動（まちネット緑）や市民啓発にもつなげられればよい。 ＊里山の整備は土地の保水力の向上に、河川の清掃はゴミによる川の堰き止め（洪水を誘発）防止につながる。 ＊自分が取り組める対策を考える（ヒントは江戸時代の循環型社会にあり）。 ＊防災（洪水）マップ記載の変化で、気象の激甚化が実感できる。 　例.　48時間降水量：405mm(150年に一度) → 792mm(予想される最大雨量)	
11月26日	田中栄治（リーダー）、釜石、高松、田中晃、松島	山田(リーダー)、増田（副リーダー）、早川、稲垣、磯野、	鷲山（リーダー）田中喜世美（副リーダー）	樋口（リーダー）、池田、佐々木、中島、片山（オブザーバー）	Bサロンの皆様の主体的なお取り組みと研究に敬意を表します。ボトムアップ型で地域タイムラインをめざす試みは、市民活動の実績ある皆様からの発想と頼もしく思います。ただ、災害タイムラインのベースは、災害対策基本法を根拠とする行政の防災計画のタイムラインなので、行政のタイムラインとマイタイムラインの乖離を解消するコミュニティタイムラインの検討が必要ではないかと私は考えます。コミュニテタイムラインも、概念の規定が必要です。 同じ地区の中に、少なくとも、「避難所タイムライン」「自治会等タイムライン」Bサロンの提唱される「互近所タイムライン」が考えられ、それが「マイタイムライン」を導くと考えられないでしょうか。 Aサロンの、家具の固定　在宅避難の推進　ハザードマップの活用　これらは自助という視点もありますが、「事前防災」という視点とも受け取れます。防災は事前の減災対策こそ重要という発信がますます必要と考えます。 Cサロン垣中氏の実践は、「自助・共助・公助の統合」が実現可能であることを実証した例です。「災害対策基本法」「災害救助法」「防災基本計画」「水防法」「地域防災計画」などの行政のタイムラインを正確に理解することから、地区においては「避難所タイムライン」「学校タイムライン」「自治会等タイムライン」「安否確認単位タイムライン」が同時に発動されることが考えられるかと思います。これらを統合してマイタイムラインをガイドできる総合的「地区タイムライン」が必要ではないかと思います。 Dサロンは、2月談義の会の構想ありがとうございます。防災塾・だるまは地震防災が根幹ですが、気候変動間関連災害に取り組んでいただいていることを頼もしく思います。今年度は、行政の取り組みや水防の体制、風水害タイムラインの理解と共有からはじめ、そこから地区等の防災対策を考察していく段階を踏むのもよいと思います。
	＊耐震化の次のテーマを検討 ・家具の固定 ・在宅避難の推進 ・ハザードマップの活用 テーマ選定にあたり、だるま会員に災害時の備えについてのアンケートを実施 →理事会に了解を取る ＊耐震化の勉強会を引き続き実施したい どう継続するかは、理事会の了解が必要か ＊9月の談義の会の際、荏本先生から提案された耐震性簡易チェックリストや、旧耐震建物の現地視察などをテーマにしたい。 →荏本先生の了解をとって企画	＊Ｂサロンのテーマは、「被災者ゼロを目指して」 →発災時に命を救うには「互近助」の共助が大切で、地域防災拠点・指定避難所などは、命が助かった後の活動。 ＊談義の会の講義とサロンの活動内容を両方「共助力向上のテーマ」として結びつけるのは難しい ＊「定例会・談義の会・サロン活動」という進行時間（スケジュール）に課題がありそう。	＊神奈川区の小学校防災拠点では安否確認も実践している。 ・発災後3時間の拠点開設などのシミュレーションを行う事ができた。 ・区割りの実測、体育館の区割り、トイレ、収容できる人数の算定も行った。 ・拠点防災マニュアルも整備中（タイムライン的なものも作成したが、リーダーに理解されなかった事がある。 ・家庭防災員、幼稚園、月一練習会、トランシーバ訓練備蓄庫の備品の使い方など、月に一つずつ実践している。 ・担当者が采配をするシステムになるよう務めている。 ＊タイムラインには＜自治体＞＜拠点防災＞＜自治会等の自主防災組織＞＜家庭・個人のマイタイムライン＞が存在する。 ・それぞれが確立されていない事、相互に共通理解化されていないのが問題。→それを統合させていくんが「防災まちづくり」では。 ・Bサロンのコミュニティタイムラインはボトムアップ型。しかしタイムラインのベースは行政の「地域防災計画」なので、その理解と協力を前提に、行政・拠点・地区・家庭、それらのタイムラインの統合をめざすべきではないか。 ・鷲山は今、自分のマンションのほか、いくつかの自主防災組織に講師としてそれを提案して推進、事実上の「防災まちづくり協議会」を実践中。 ・トップからボトムまで、その中間の地区タイムライン充実を目指す必要がある。	◎11月19日に行った打ち合わせ（参加：池田、佐々木、田中晃、田中栄治（Zoom参加：Aサロンリーダー）、吉開）内容を確認 　---Quote--- ①鎌倉萌に送った談義の会の案内「近年の激甚化した気象現象（特に降雨）を正しく読み解き、その情報をどう防災行動（避難スイッチON）に生かすかを考える」を進めるためには、コミュニティタイムラインを考えなければならない。 ②田中栄治さんから、現在小田原で取り組んでいる「水害のタイムライン」についての紹介があった。 →未だ、マイタイムライン作成の為の意識啓発の段階（共助には至っていない） ③タイムラインは、Bサロンのテーマと重複するので避けるべき ④Dサロンは、ABC（自助・共助・公助の実務）とは別の観点から取り組むべき（問題提起や情報発信） ⑤現段階では、地域防災にこだわる必要はない。 ⑥今年度は、まず「異常気象によって引き起こされている現象」の理解に専念すべき→防災行動もそこから始まる。 　---Unquote--- ◎Dサロンの活動コンセプトは、勉強・啓蒙→提案へ ◎だるま年間計画に載っているDサロンテーマ「地球温暖化と鶴見川クライシス」に立ち返る。 　→11月29日に池田・樋口が京浜河川事務所を訪問（だるまの活動紹介資料を持参）し、講演の依頼をする。 　→気候変動を踏まえた水災害対策（流域一体での）について、話が聞ければよい。	
2月18日	田中栄治（リーダー）	山田(リーダー)、増田（副リーダー）、磯野、稲垣、片山、萩原、磯野	鷲山（リーダー）田中喜世美（副リーダー）大西　原田　河原	樋口（リーダー）、吉開（副リーダー）、池田、佐々木	新体制で進んできた２０２１年度最後の談義の会。「時事防災課題」という新しい領域に踏み込み、今回の談義の会を計画されてきた樋口リーダーはじめ、Dサロンの皆様に、敬意を表したいと思います。協議を重ねて、今回の講師選定となり、事前の質問の共有もして、協議が深まる談義の会となりました。 　１年間のサロンによる取組を経て、それぞれのサロンは、より学びたいこと、自ら発信したいことをそれぞれしっかりともたれていることはサロン活動の成果ではないかと思います。 　談義の会の講師選定は、サロンのテーマに拘束されずに考えたいというご意見もでているので、それはあるかと思います。 　しかし、Bサロンにあるように「だるまの研究成果を市民の防災活動に役立てる」活動をするためには、だるまとしての理念、理論、提案の共有化が必要かと思います。それがあって、「実践的防災まちづくりコーディネーター養成講座」のカリキュラム構築もできると思いますので、各サロンの観点から、だるまがめざす「防災まちづくり」とはこういうもので、行政、自主防災組織、家庭や個人にこう提唱し、啓発してしたいことの共有をめざすところです。 　１０年記念誌だるま１０周年記念誌荏本先生の言葉には「地域が団結して行政機関との相互の協力・連携体制」という具体的な理念が見られます。その具体像と、具体化の道筋を各サロンで研究し、相互にそれが統合できればと願うところです。
	会場のZoom PCが故障のため、実施できなかった（後日Ａサロンとしての打ち合わせを実施） 2月23日打ち合わせ（18:30～20:00） 参加者：田中栄治（リーダー）、田中晃（記録）、釜石、松島 ＜Aサロンの今後の活動について＞ ＊自助力の向上活動を開始したので、引き続きこの観点からだるま会員に提案していく。 ＊具体的なテーマは、だるま会員へのアンケートを出し、その結果で決定する。 ＊活動の成果は、談義の会でだるま会員へ提案する。 ＜だるま会員への自助力に関してのアンケート＞ ＊自助力のアンケートたたき台を打ち合わせた。 ＊最終案は3月5日までに完成	＜2022年度に向けてのサロンのあり方＞ ＊「被災死ゼロを目指して」という目標に取り組んできた活動をどの様に継続するかは、「自助・共助・公助」等の枠分けがなくても出来ることで、サロン別にこだわる必要はない。 ＊マイタイムラインやコミュニティタイムライン等の作成を目標にするのではなく、各個人が関心のある課題をサロンで出しながら自由に研究すべき。被害想定の甘さ等を見直すことも大事。 ＊もっとだるまメンバーの地域の活動をしっかり把握して、参考に出来ること等も知った上で、取り組めることを望んでいる。 ＊定例会や談義の会の運営役割分担は必要だが、「談義の会」の講演内容とサロンの研究内容をリンクさせる必要はなく、「その時々に考えるべき事柄」をもとに臨機応変に「談義の会」の講演テーマや講師を決めて良いのでは？ ＊「だるまの研究成果を市民の防災活動に役立てる」活動をすることを、メンバーで楽しんで取組み、自分の地域に還元できるかが課題。	（講演について） ・レベルが高い専門的な話で勉強になった。 ・治水対策の徹底への理解と、警戒心の両方を育てるのが課題。 ・多摩川他、都市河川で対策が遅くれている実態がある。 ・Dサロンの取組は、画期的で良い。 （２０２２年度の取組方針について） （１）自助・共助・公助の統合を目指すことは、だるまの基本理念である。 「地域が団結と行政機関との相互の協力・連携体制」（１０年記念誌だるま１０周年記念誌荏本先生の言葉】 （２）これを具現化する方法は、災害対策基本法４２条による「地区防災計画」の作成と行政への提案である。 （３）地区防災計画を誰が、何時、何をするか一覧表にしたものが「タイムライン」である。タイムラインの作成と実践を進めたい。 ４　談義の会実施計画 　講師　河田恵昭博士　減災思想、タイムラインの導入を推進リモートでのご講演を依頼したい。	＊談義の会は、外部の専門家に来てもらって行うと説得力がある。 ＊今日の談義の会（講演）でも言われていたが、鶴見川の治水も洪水対策だけでは不十分で、流域の環境保全や、土地開発、暮らし方も含めて総合的に行わなければならなくなった。これは、SDGsの考え方そのものだ。 ＊鶴見川の河川敷の保全は、自然を残す（生態系を保存するために、草木を残したり、ビオトープにしたりしている）様にしているが、支流では河川の流れを確保するために、雑草の除去が必要 →場所に応じた対策が取られている。 ＊今日の談義の会を、各グループ（A,B,C）がどの様に評価したか？ →それを来季のテーマ決めの参考にしたらよい。 ＊感染症が収まったら、「鶴見川流域センターの見学会」も行いたい（現在はオンラインの施設見学（WEB会議：30～90分程度）のみ）。 ＊自然災害・人災・テロ等が様々な要因・原因が複雑に絡み合う中で起こるのが災害だ。 SDGｓはこれらの災害を抑止するために、考えられた。 →何が起こるかを予測するのが難しい時代になったが、その時々のタイムリーな情報を発信し、皆で共有していく必要がある。 →「多面的に考える」がキーワードになる。 ＊潜在的な脅威として存在する、日本に対する武力攻撃（サイバーを含む）に対しては、国民保護法で細かく規定されており、知っておいた方がよい。危機管理室にいた杉原さんが詳しそうだ。 ＊年度末の理事会（3/17)の前に、Dサロンとしての打ち合わせ（考え方のすり合わせ）を持ちたい。	
3月				3月2日打ち合わせ(14:00～15:30＠みどりーむ) 参加者：樋口（リーダー）、吉開（副リーダー）、池田、佐々木、磯野 ＊2月18日のサロン打合せでは以下の話が出た。 ・Dサロンは、災害を自然災害に限らず、「人災も含めた幅広い現象（生活を営む上で生じるリスク）としてとらえる」「何が起こるかを予測するのが難しい時代になったが、その時々のタイムリーな話題を取り上げ発信する」方向で進む。 ・第185回談義の会に対する各サロンの評価をテーマ決めの参考にする。 ＊各サロンからの評価は概ね好意的（講演を真剣に聞いてくれた）で、新しい視点に基づく意見は出なかった。 ＊SDGsと防災（インターネット情報）-公共財団「日本ケアフィット共育機構」を見ながら、誰一人取り残さないためのSDGｓ（インクルーシブ防災）の視点が大切であることを確認した。 ＊SDGsは、2015年に仙台で行われた「第3回国連防災会議」で採択された「仙台防災枠組み2015-2030」から始まった。 この会議には、だるまから池田・荏本・高松各氏が参加したが、その際に東大の加藤先生（荏本先生の教え子で防災士）を紹介され、以来何度かだるまで講演をして頂いている →ネットワークを広げるためには、チャンスを逃さないことが大切。 ＊ロシアのウクライナ進行の様な危機に際して、まず必要なのは「食」。横浜の商工会議所も農業に関心を示す様になった（2/25および3/18に農商工連携セミナーが開催される。 ＊現代は、トランスフォーメーション（変化）の時代。防災も新思考（柔らか頭）で考えるべき。	